

# 猫のウイルス感染症

猫の外飼いのリスクのひとつが下記のようなウイルス感染症です。  
発症しない猫もありますが、ウイルスそのものは消滅しないため、注意が必要です。



## CASE 01

ねこめんえきふぜん

### 猫免疫不全ウイルス感染症

猫同士のケンカでウイルスがうつる場合もあるため、外飼いは感染リスクが高い



いわゆる「猫エイズ」と呼ばれている病気です。猫免疫不全ウイルス(FIV)が感染することにより、様々な症状を引き起こします。感染経路は咬傷によるものが主だと考えられています。母子感染もおこるようです。

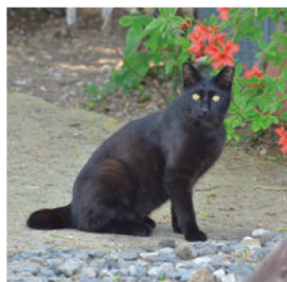
FIVに感染した直後は急性期と呼ばれ、発熱やリンパ節の腫れなどが認められます。これが数週間～数ヶ月続いたのち、潜伏期に入ります。潜伏期は数年続くとも言われており、そのまま寿命を迎えることもあります。

その後、全身のリンパ節が腫れる時期を経て、発症します。発症すると口内炎や歯肉炎、くしゃみなどが認められ、その後様々な合併症を併発して衰弱していきます。発症してからの進行は早く、1年程度で死に至るとされています。

また、FIVに感染すると、リンパ腫などの腫瘍の発生率が高くなることも知られています。感染しているかどうかは院内キットを用いた血液検査で確認できます。ただし、感染直後は誤った結果となることがあるため、1～2ヶ月後に再検査をする必要があります。現時点で感染後の効果的な治療法はなく、感染させないことが重要になります。一番の感染要因は、すでに感染している猫と喧嘩をして噛まれてしまうことなので、外に出さなければ感染のリスクはありません。また、室内で感染猫と非感染猫が同居している場合でも、食器などを介しての感染はないとされています。



口内炎になり抜歯した猫



屋外は猫にとってリスクが高い

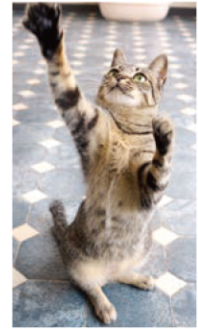
## CASE 02

ねこはっけつびょう

### 猫白血病ウイルス感染症

猫白血病ウイルス(FeLV)の感染により、様々な腫瘍を引き起こしやすくなるのが問題となります。感染経路は感染猫の唾液や血液を介した感染のほか、母子感染も起こりやすいとされています。FIVと比べると感染しやすく、感染猫と非感染猫を同居させる場合は部屋を分けるなどの対処が必要とされています。ウイルス感染そのものというよりは、そのせいで発症リスクの上がる腫瘍が問題となります。特に縦隔型リンパ腫を起こしやすくとされており、それ以外にも様々なタイプのリンパ腫、白血病、血液疾患を発症しやすくなります。

FeLVもFIVと同様に感染後にウイルスを排除することはできず、感染させないことが重要となります。外に出さず、感染猫と接触させないのが一番ですが、FeLV感染を予防するためのワクチンもあります。ワクチンによる予防は100%ではありませんが、どうしても外に出す場合は、事前にワクチン投与をおすすめします。



## CASE 03

ねこでんせんせいふくまくえん

### 猫伝染性腹膜炎(FIP)

猫コロナウイルスによって引き起こされる、致死的な感染症です。猫の腸には病気を引き起こさない猫腸コロナウイルスが存在し、これが突然変異を起こすことで猫伝染性腹膜炎ウイルスに変わると考えられています。多頭飼育で発生頻度が高いこと、純血種の猫で感染しやすいことがわかっており、糞便や唾液から感染すると考えられています。詳細な感染経路や突然変異を起こす原因は明らかではありません。発熱、元気消失、食欲低下といった症状があり、腹水や胸水が溜まるタイプ(ウェットタイプ)と眼や神経に異常が出たり、肝臓や腎臓に肉芽腫と呼ばれるしこりを作ったりするタイプ(ドライタイプ)が存在します。胸水が溜まると呼吸が苦しくなります。現時点では、治療法・予防法ともに確立されておらず、発症すると数週間～数ヶ月で死に至ります。

- 呼吸が荒い
- 元気、食欲がない